

## 川崎美術館研究(一) 文献資料からたどる川崎美術館と神戸川崎男爵家コレクション

石 沢 俊

明治二十三年、神戸市布引の川崎正蔵邸に開館した川崎美術館は日本初の私立美術館と考えられている。本稿では、川崎美術館と神戸川崎男爵家コレクションに関する研究の端緒として、同時代の新聞・雑誌等の文献資料から、川崎美術館と神戸川崎男爵家コレクションの歴史をたどる。

### はじめに

川崎正蔵(一八三六〜一九二二)は川崎造船所や神戸新聞社、神戸川崎銀行等の創業者として、神戸はもとより近代日本の発展に貢献した実業家である。川崎は古美術品の収集家としても当代に名を馳せ、二〇〇〇点にも及ぶと伝えられる彼のコレクションは、中国絵画、仏画、室町絵画、桃山絵画、江戸絵画、茶道具、宝玉七宝など多岐にわたる。大正三年(一九一四)、川崎の三回忌に國華社から刊行された豪華図録『長春閣鑑賞』全六冊や、二度の売立目録『神戸川崎男爵家蔵品入札目録』(昭和三年(一九二八))、『長春閣蔵品展覧図録』(昭和十一年「同十三年再刊」)にはあわせて約一〇〇〇点が図版付きで紹介されている。これらをひもとくと、中国絵画では伝銭舜举筆「宮女図」(現在は国宝・個人蔵。以降の作品表記もこれに準ずる)や伝顔輝筆「寒山拾得図」(重要文化財・東京国立博物館蔵)、仏画では「千手観音像」(国宝・東京国立博物館蔵)や「宝楼閣曼荼羅」(フリーア美術館蔵)、室町絵画では文成外史筆「放牛図」

(重要文化財・京都国立博物館蔵)や岳翁藏丘筆「武陵桃源・李白觀瀑図」(重要美術品・出光美術館蔵)、桃山絵画では伝狩野永徳筆「桜松群馬図屏風」や伝狩野孝信筆「桐鳳凰図屏風」(重要美術品・林原美術館蔵)、江戸絵画では狩野探幽筆「桐鳳凰図屏風」(サントリ美術館蔵)や円山応挙の旧南禅寺帰雲院障壁画(東京国立博物館蔵)、そして伊藤若冲による幻の「象鯨図屏風」など、名品尽くしである。神戸川崎男爵家コレクションで日本・東洋美術史が語れるといっても過言ではない。

川崎と美術品収集に関しては、明治二十三年(一八九〇)九月六日、神戸市布引の自邸内に私立美術館「川崎美術館」を創設したことは特筆すべき事柄である。川崎美術館では年に一度、同館と付属施設「長春閣」で三〇〇〜四〇〇点ほどのコレクションが展覧されていた(図1・2)。従来、日本初の私立美術館は大正六年、大倉喜八郎が創設した大倉集古館と考えられてきたが、約三十年前に川崎美術館が開館していたこととなる。現在把握するかぎりでは最

古の私立美術館として一般に公開されていたにもかかわらず、現在は歴史に埋もれてしまっている。昭和九年開館の白鶴美術館、同十五年開館の池長美術館、戦後に池長美術館を継承した市立神戸美術館、神戸市立南蛮美術館、神戸市立考古館、香雪美術館、神戸市立博物館などへと至る神戸の博物館の系譜を、ひいては日本の博物館史を考える上で川崎美術館はきわめて重要である。

本研究は、川崎正蔵による古美術品収集と川崎美術館の活動に光を当て、その美術史上の意義を明らかにすることを目的としている。目下、神戸川崎男爵家旧蔵品の作品調査、川崎美術館及び神戸川崎男爵家コレクションに関する文献調査に取り組んでいる。そして、調査研究の成果として、川崎正蔵の功績の顕彰とコレクションの再会、川崎美術館の再現を目指す展覧会を企図している。

小稿はその端緒として、川崎美術館と神戸川崎男爵家コレクションに関する新聞・雑誌記事等を紹介する。調査の途上ではあるが同時代の文献資料を提示することで、川崎美術館の活動とコレクションに光を当て、関心が高まることを願う次第である。

#### 〔凡例〕

- ・ 記事は刊行年順の列挙を基本とし、項目毎に分類した。
- ・ 記事見出しは太字とした。
- ・ 旧字体は固有名詞を除き、新字体に改めた。
- ・ 訓読の都合、適宜句読点を入れた。
- ・ 紙面の損傷などで判読不能な字は■で示した。

#### ◆川崎美術館開館(明治二十三年九月六日)と第一回展観(同年九月七日〜八日)

川崎美術館及び長春閣は明治二十三年九月六日午後二時に開館式が執り行われた。伊藤博文をはじめ、各地の貴顕紳士約二〇〇名が招待され、昼夜ともに花火が打ち上げられるなど、盛大な饗応だった。館主・川崎正蔵は開館の詞にて、日本の美術品の海外流出を憂い、収集したコレクションは千数百点に及ぶという。コレクションを秘蔵することなく、美術館で広く公開することで美術と国に貢献する熱意を語る。「神戸又新日報」と「大阪毎日新聞」にほぼ同一の開館の詞が掲載されているのは、⑤にある陳列品目録に拠ると考えられるが、開館記念陳列品目録は所在不明。ただし、主な陳列は⑤が伝えており、その概要を把握できる重要な資料である。また、⑥・⑬の九鬼隆一による祝辞は、川崎美術館が日本初の私立美術館である裏付けと見なせよう。美術館と長春閣の建築について⑧では文明天文時代の様式に擬したと伝えるが、設計者は工匠で古美術鑑定家・収集家でもあった柏木貨一郎(一八四一〜一九八)である<sup>四)</sup>。

翌七日から八日の二日間にわたり、第一回展観が開催され、一般公開が行われた。入館には切符(縦覧券)が必要であったが、その反響は大きく縦覧券を持たない人々も大挙して押し寄せたようだ。

①明治二十三年九月三日「神戸又新日報」

「川崎美術館の陳列品 来る六日、当市布引下なる川崎美術館開館

式に陳列する物品は、館主川崎正蔵氏が多年秘蔵せし古書画古器物の内、最も優等の品々を撰抜したるものにて、開館当日と七日八日の両日に限り縦覧せしめ(切符を持参するものに限り)、終れば之を仕舞ひ置く筈にて、仮令十月頃になりて開館縦覧せしむることあるも、その時の陳列品は今回の品とは大抵別物なれば、若し今回縦覧せずんば、今後は二年先きに見らるゝか、三年の後になりても見られぬか、逆じめ期し難しとなり」

②明治二十三年九月七日「神戸又新日報」

「川崎美術館の開館式」は昨日午後二時より執行したり。来賓は伊藤伯を始め、当地は勿論京都、大坂、滋賀、三重、奈良等の各府県の高等官、居留地外国各領事及び紳士各地貴族院多額納税者互撰議員、諸会社員、新聞記者等にて無慮二百余名あり。館の門前にある各茶屋の座敷を借切りて休憩室に充て、陳列品を見終りし後は仮に設けたる食堂にて日本料理の立食の饗応あり。余興としては昼夜とも煙火を打ち挙げ、食堂には球燈を吊しなどしてなかなか盛なる事なりしと。尚ほ詳細の景況は次回に記すべし。」

③明治二十三年九月八日「大阪毎日新聞」

「開館の詞」一昨日神戸諏訪山「引用者註…正しくは布引」なる川崎正造<sup>あき</sup>氏の美術館開館の式を挙ぐるに当り、同氏は来賓に向て左の詞を讀上げたり。美術館新築落成し、將に本日<sup>あした</sup>を以て開館の式を挙げんとす。時に貴賓諸君の光臨を辱なふす。正蔵の榮、之れ

に過ぎず深く謝し奉る処なり。抑も吾邦の美術品は諸外国に勝り、珍奇優美の品少なしとせず。然るに、滄桑一変之れが保存の途幾んど絶え、或は不用品と為し、又無用の長物と見做し濫りに売却し、其海外に涉りたるもの少なからず。豈に歎すべきの至りならずや。正蔵、前きに之を思へ、数十年以来美術品にして優美なりと信ずれば、其価の高下に拘はらず力の及ぶ限りは之れを購求し、今集て千数百の數に昇れり。而して、惟ふに之れを秘蔵しかく格納し置けば、独り其道に益なき耳ならず、国の宝も埋没するに似たり。於是、去年の夏始めて此美術館の新築に掛り、今や漸く成るを告ぐ。爾來、時々開館して広く美術家の参考に供し、以て其道進歩の一助と為すも、豈に国家に裨益なしとせんや。幸に微■の有る所を諒せられ、而して品評の如何は謹で諸君の高覽に譲る。

頓首再拜」

④明治二十三年九月九日「大阪朝日新聞」

「伊藤伯」は一昨々日午後三時ごろ神戸なる諏訪山の別邸より、布引の川崎正蔵氏が美術館開館の宴に臨みしも、同午後四時頃には已に帰邸せり(後略)」

⑤明治二十三年九月九日「大阪朝日新聞」

「神戸川崎美術館」兵庫縣神戸市の紳士川崎正蔵氏は夙に我国美術品の散逸甚だしく海外に濫出する等の事少からざるを嘆き、十數年来美術品にして優等の物ある時は価の高下に拘はらず、力めて

之を購求し其数積んで二千種に垂んとせり。左れど徒に之を秘蔵するは世益を図るの道に非ず。寧ろ時々陳列して美術家の参考に供するの得策なるを信じ、去年の夏始めて美術館の工を起したるに、今や全く落成を告ぐるに至りぬ。依て去六日、神戸兵庫及び京阪其他の紳士無慮三百名を招待して、開館の饗宴を開きたり。美術館の位置は布引にして神戸三の宮停車場を距る事十町許り、布引山の中腹にして前に海浜を控へ、眺望絶美なり。該館の建物は足利義政時代の結構に模擬したる桧作りの二層楼にて、玄関に掲げたる「川崎美術館」の扁額は伊藤伯の揮毫なり。ここに支那七宝の大花瓶ありて、景文の金地に鶴と大浪の屏風を建て、次の間の入口に光琳秋草の二枚折を建つ。此処は三の間にして、花瓶壺等を数多陳列し、次の広間と上の間には陳列品なく入側に蒔絵の硯箱印籠等を陳列せり。其次は大書院にて床の間に応挙の雪景山水の大幅を掛け、正面に賜物の銅花瓶を置き、其左右に古代金装の太刀、蒔絵の書棚、蒔絵の香炉、香箱、見台等を陳列せり。中に就き、目覚しきは古製の太刀にて総金具金銅蔓草の透かし彫に瑠璃玉を嵌め、柄は黒鮫、鞘は金粉地に鳥紋螺鈿剥落して、頗る古代のものなりと云り。ここに最も驚くべきは上の間（八枚）広間（十二枚）三の間（十一枚）の襖絵て応挙の墨画山水にて、画は密ならざるも墨痕淋漓として自ら神韻を有せり。西廊下の端に仏間ありて、天井を金地極彩色の古画（花鳥人物等）三十五枚にて張り、古仏数個を安置せり。又西廊下には数十の画幅と数十個の花瓶、香炉、陶器等を陳列せり。夫より楼上に至れば、階子

の傍に大幅の仏画を掛け、上り口に古画の屏風を建たり。此古画の画工、分明ならざるも天正より慶長の間のものなりと云へば土佐光吉一徳時代のものなるべし。楼上にもまた古画美術品を数多陳列したるが、其中に上段床の間の顔輝筆寒山拾得の双幅は東山義政より織田信長に伝来したるを、其後信長より本願寺の頭如上人へ和睦の節贈りしものにて、長く本願寺の什物となり居たるを近頃故ありて川崎氏の手に入りしもの由にて、表装裂の結構と云ひ、実に希世の尤物なり。其他巨勢金岡の文殊の像、雪村の観世音宝塔を拝する図、然可翁の寒山を蔭にし拾得のみを見せたる図等は最も珍しく覚えたり。以上、陳列の諸品は二百五十余にて、尚他日追々に他の品と引替へ陳列の筈なりと云り。右通覧し終り、館を出て山腹の庭上に至れば何ぞ計らん、ここにも又美術品の陳列あらんとは瞳を定めてよくよく見れば、此は是本日の来賓を饗応の為め、京都及び大阪より出品の活美人にて軈絵の紋付たる上布の揃衣を着し、幕うち廻したる立食場の中に立ち、数十の美人長柄の銚子を取り、食卓を隔て酒を侑めたり。此間全面の鉄道脇の畑地にて烟火を打上げ、夜に入りては園中に掲列ねたる無数の紅燈に点火し頗る盛況を極めたり。附云、本館は一昨日昨日の両日、兼て知友に配付せる縦覧券を持参の者に限り、縦覧を許したりとぞ。」

⑥明治二十三年九月九日「大阪朝日新聞」

「九鬼氏の祝詞 右の川崎美術館の開館につき、九鬼隆一氏より

『泰西には一私人にて美術館等を建設せる者往々あれども、我国にて私立の美術館を設けたるは川崎美術館を以て嚆矢とす云々』との祝文を送られたる由なるが、我々も此の如き盛挙者の漸次輩出せん事を希望す」

⑦明治二十三年九月九日「神戸又新日報」

「川崎氏の饗応 布引下なる川崎正蔵氏には、目下来神中の伊藤伯・高島子・中井議官・藤田傳三郎の諸氏を一昨夜自邸に招きて饗応せし由にて、美術館の開館式に付き、京都大阪等より来りし画家某々等も陪席したりと。」

⑧明治二十三年九月九日「神戸又新日報」

「川崎美術館開館式の景況 布引下なる川崎正蔵氏が新たに出来たる美術館は、去る六日午後二時開館式を行ひたり。当日の来賓は伊藤伯、高島中将、今井少将、中井元老院議官を始め、兵庫大阪京都滋賀三重奈良各府県の高等官、貴族衆議両院議員、諸会社員、新聞社員、居留外国領事及び紳士等無慮百数十名にして、一同前に於いて賓客章標及び列品目録、縦覧人心得等を受取りたる後、その通りに掲示しある休憩所（何れも館下の楼亭を以て充てたり）に退そきて涼を納れ休憩す。兎角する内に三発の煙火空中に轟きけるを合図となし一同迂曲したる阪路を登りて美術館前に到る。館主川崎正蔵氏衆賓を歓迎し正面に立ちて左の祝詞を朗読す。美術館新築落成し、將に本日を以て開館の式を挙げんとす。時

に貴賓諸君の光臨を忝うす。正蔵の榮、之れに過ぎず深く謝し奉る処なり。抑我国の美術品は諸外国に勝り、珍奇優美の品少しとせず。然るに、滄桑一變之れが保存の途幾しと絶え、或は不用品となし、又無用の長物と見做し濫りに売捌き其海外に涉りたるもの少からず。豈歎すべきの至りならずや。正蔵、前きに之を思ひ、数十年以来美術にして優美なりと信ずれば、其価の高下に拘はらず力の及ぶ限りは之れを購求し、今集て千数百の數に昇れり。而して、惟ふに之れを秘蔵し格納し置けば、独り其道に益なき耳ならず、国の宝も埋没するに似たり。於是、去年の夏始めて此美術館の新築に掛り、今や漸く成るを告ぐ。爾来、時々開館して広く美術家の参考に供し、以て其道進歩の一助となすも、豈国家に裨益なしとせんや。幸に微意の有る処を諒せられ、而して品評の如何は謹て諸君の高覽に譲る。

頓首再拜

右にて式を了へたれば、賓客おのおの館内に入りて陳列品を縦覧す。館の入口の上には伊藤伯が開館の前二日の夜、宇治川常磐楼にて揮毫したる「川崎美術館」の五大字行体の扁額あり。款して、庚寅九月伊藤博文といふ。夫より館の階下階上隈なく陳列したる古器物古画等を縦覧す。その列品は目録にある通りにて、何れも美術の旨に副ひたる珍品のみと知られき聞く。川崎氏は開港以来海外の客来つて美術品を購求し去り、遂には真の美術国たる日本にして美術品の遺留するものなきに至らんことを慮れ、代価を問はず買入れしものゝ由にて、その総数は実に二千余点なるも今回

は二百八十数種を陳列したるものなりとぞ。観終つて館を出れば、右手芝生の上に設けたる飯食堂あり。立食にて日本料理を饗す。杯酌には京都大阪より召したる美人十数名が川崎氏の定紋附きたる小紋の単衣を一様に着なして周旋す。前面には布引下の楼台、葺合辺の田園、芦屋の浦、敏馬の浜などの景色を見下して心地何とも云はれず。立食を辞して阪路を下らんとする処、左手に当りて煎茶抹茶の席あり。高島中将は流石武人だけに、拳大の梨子を皮の附きたるまゝ頬張りて茶席の方へ赴き居るを見受けぬ。此処の景色も亦た妙にて賓客は人造の美術を見来り見飽きて、今又た天然の美術に見とれしなるべし。茶好まぬ人は茶席に入らずして帰路に就き、午後五時半頃には主人と接待委員のみ残りたりと。此の日は昼夜とも煙火を打ち上げ、布引下の本通りより美術館の上なる山間までに幾多の球燈を連吊し、夜間は之れに火を点じたれば遠く望めば数百丈の蔦葛と見紛ひしなるべし。以上は開館式当日の見る処にして、一昨七日、昨八日は縦覧切符を得たる人々のみ行きて縦覧せしが、両日とも車声蹠音の絶え間なかりしといふ。因に記す、美術館は川崎氏邸宅の傍、一段高き処に山に凭りて建築したるものにて文明天文時代のものに擬せしなりとぞ。」

⑨明治二十三年九月九日「大阪朝日新聞」

「伊藤伯 一昨日午後三時ごろ神戸なる諏訪山の別荘より布引の川崎正蔵氏が美術館開館の宴に臨みしも、同午後四時ごろには已に帰邸せり(後略)」

⑩明治二十三年九月十日「神戸又新日報」  
「雑録

川崎美術館に物しける日思ひつゞけゝる 田所千秋  
秘置かば栄在珠も何為に今日社光世には放てれ玉匣二つは世にも稀ら成珍の宝を堆高く諾も世に銜宝の数々を見るも、僻目は觀かり覺。富人は多く在ども、美物を美と熟見る人ぞ少なき。在難き宝爾有社賞栄す人数にだに入ま欲けれ。」

⑪明治二十三年九月十八日「神戸又新日報」

「美術館人絶えず 布引川崎氏の美術館は去る六日を以て開館式を行なひ、七日八日の両日は切符を所持したる人に限り、美術品の縦覧を許したる事なるが、此の事各地の新聞紙に搭載せられて、評判高くなりしより、中には美術館は何時にても開きて何人にも縦覧せしむること恰も博覧会か共進会の如きものならんと心得るものゝあるにや。その以後は日々幾人となく川崎氏の邸内へ案内もなく入込来り、美術館は何処ぞと問ふものなどありて、其時々云々と其訳を断るに、随分困り居る由なり。聞く所ろに抛れば、前きに陳列せし品々は尽とく土蔵に格納し、復更に品を取換へ陳列するは容易な手数にあらざれば、当分は開館せず。追て時機を見計ひ陳列縦覧を許すときは、其前予め披露する由。」

⑫ 明治二十三年九月十九日「神戸又新日報」

「松方幸太郎氏 久しく海外に留学中なりし松方伯の令息幸太郎  
「引用者註：正しくは幸次郎」氏は、予記の如く昨朝入港したる仏  
国郵船イフヂヤ号にて来神し、海岸常磐舎に休憩する筈なりしが、  
前刻より来り迎へし川崎正蔵氏に誘はれ、直ちに布引下の同氏方  
に赴むき、休憩の上、午後の同船にて帰京したり。尤も日本銀行  
大坂支店支配人川上左七郎、正金銀行神戸支店役員等も海岸まで  
出迎へしよしなり。」

※松方正義の子息・幸次郎の留学に際し、川崎正蔵は経済的に  
支援した。明治二十三年の帰国時、幸次郎は開館間もない川  
崎美術館を鑑賞した可能性がある。

⑬ 明治二十三年十月十四日「読売新聞」朝刊

「九鬼成海氏の贈文 宮中顧問官九鬼隆一（号成海）氏は神戸市布  
引なる川崎正蔵氏的美術館新築成り、その開館式を行ふ際案内を  
受けしも、障る事ありて臨席せざりしかば、当時左の如き短文を  
認め贈りし由にて、字体は楷書にて筆力遒勁なりしと。

神戸布瀑之畔。高爽潔清山水双美中。有友人川崎君之居。君特  
不厭勞費。私構美術館。面陳嘗所精蒐庶品欲以供同志縦覽。歴  
史美術知識學術。凡所以增国光迈国福者概資益於茲。盖在海外  
雖間有能為之者。若本邦則実係創建矣。顧他時必将有饗慕而倣  
之者。余焉得不称賛愉揚之哉。

明治二十三年九月一日

九鬼成海識」

◆饗応の場として

川崎美術館は年一回の定例開館のほか、神戸を訪れた来賓を川崎  
がもてなす場としても使用されていた。また、川崎と交友のあつた  
伊藤博文らはしばしば川崎邸を訪れ、美術館や所蔵品を鑑賞した。

⑭ 明治二十三年十月三十日「神戸又新日報」

「川崎氏の宴会 本件の貴族院議員川崎正蔵氏は一昨日午後四時よ  
り懇意の人々を布引の自邸に招待し、美術館を開きて所蔵の美術  
品を陳列して、其の一覽に供し終て宴会を催せり。当日招きに応  
じて来会ありしは吉井友實、高島鞆之助、九鬼隆一、税所篤、林  
董、馬屋原二郎、畠山重明、富永冬樹、平山靖彦、大島邦太郎、  
南挺三、野間口兼一、鳴瀧幸恭、山口辰彌、久原庄三郎、廣瀬幸  
平、熊谷辰太郎等の諸氏にて主客十分の歓を尽し、九時過ぎ退散  
したりといふ。」

⑮ 明治二十四年四月十九日「東京朝日新聞」

「神戸における伊藤伯 去十七日朝大阪朝日新聞社員は伊藤伯を神  
戸諏訪山なる山荘に訪ひたりとて、其時の模様を報ずる所に拠ば、  
伯は十六日朝京都より歸りたる後も相替はらず優游自適の有様に  
て本日（十七日）も原山口県知事上京の途次訪問なして、伯と相  
対して例の囲碁に余念なく午後は布引の川崎正蔵氏方へ赴き、同  
氏珍藏の美術品を一見する約ありとの事なりき。（後略）」

◆第二回展観(会期不明。明治二十四年か)

第二回展観に関する記事は未確認。第一回・第三回の会期から、明治二十四年の開催と想定する。

◆第三回展観(明治二十五年九月十八日〜十一月六日)

第三回展観は明治二十五年九月十八日から十一月六日まで開催された。開館日は毎月第一・第三日曜日。雨天の場合、翌日曜日に順延するのは作品保存のためだろう。第一回同様、入館には切符を必要としたが、初日は予想以上に来館者が多かった。開館日直前の金・土曜や開館当日には新聞広告(⑱・⑲・⑳・㉑・㉒)も出稿していた。川崎美術館の展覧会広報で、美術館への関心が高まったと考えられる。

⑱明治二十五年九月九日「神戸又新日報」

「川崎美術館」は昨日来美術品の陳列に着手したれば、近日中に第三回の開館を行ふべし。」

⑲明治二十五年九月十六日「神戸又新日報」

「川崎美術館」市内布引の川崎美術館は明後十八日より第三回の列品を切符持参の人に限り縦覧に供するよしにて、同日後は例により第一第三の日曜日に限り開館の筈。但し当日雨天なれば、次の日曜日に順延の事。」

⑳明治二十五年九月十六日「神戸又新日報」

「第三回美術品陳列ス。第一第三ノ日曜日切符持参ノ方ニ限り、縦覧ニ供ス可シ。  
但当日雨天ナレハ次ノ日曜日ニ順延ノ事。

布引 川崎美術館」

㉑明治二十五年九月十八日「神戸又新日報」

「第三回美術品陳列ス。第一第三ノ日曜日切符持参ノ方ニ限り、縦覧ニ供ス可シ。  
但当日雨天ナレハ次ノ日曜日ニ順延ノ事。

布引 川崎美術館」

㉒明治二十五年九月十八日「大阪朝日新聞」

「川崎美術館」神戸布引の川崎美術館は今十八日より開館し、毎月第一第三の日曜日に限り、切符持参の者へ縦覧させるよし。但し、当日雨天なれば次の日曜日に順延」

㉓明治二十五年九月二十四日「神戸又新日報」

「川崎美術館」市内布引の川崎美術館は兼て本紙上に記せし通り、去る十八日を以て開館せしが、当日は早朝雨模様なりしに似ず、間もなく晴れ渡りたれば、縦覧人思ひの外多かりし由。尚ほ次の開館日即ち来る十月二日には来館人一層多かるべし。」



②② 明治二十五年九月三十日「神戸又新日報」

「第三回美術品陳列ス。第一第三ノ日曜日切符持参ノ方ニ限り、縦覧ニ供ス可シ。

但当日雨天ナレハ次ノ日曜日ニ順延ノ事。

布引 川崎美術館

②③ 明治二十五年十月一日「神戸又新日報」

「第三回美術品陳列ス。第一第三ノ日曜日切符持参ノ方ニ限り、縦覧ニ供ス可シ。

但当日雨天ナレハ次ノ日曜日ニ順延ノ事。

布引 川崎美術館

②④ 明治二十五年十月二十六日「神戸又新日報」

「川崎美術館請客縦観

如仙庵 船山 漁客 稿

擲財傾貨集異珍。清娛請客供■陳。彼応足利盛時物。此則徳川初代人。破鼎摩挲字描漢。粉圖穿鑿妙通神。超然奇秘備真理。限界惟知新一新。

(中略)

川崎美術館縦覧者幾百千人而一無題詩去者如仙庵主人一律殊可珍重。

(中略)

神嘗祭後二日

水哉 妄 評

②⑤ 明治二十五年十一月十一日「神戸又新日報」

「川崎美術館の閉館 市内布引の川崎美術館は去る九月以来第三回の列品をなし、同好者の縦覧に供し居りしが、去る六日第一日曜日限り閉館したり。」

②⑥ 明治二十五年十一月十一日「神戸又新日報」

「去ル六日限りニテ、本年ハ閉館ス。十一月

布引 川崎美術館

②⑦ 明治二十五年十一月十二日「神戸又新日報」

「去ル六日限りニテ、本年ハ閉館ス。十一月

十一月

布引 川崎美術館

◆第四回展観(明治二十六年六月四日)

第四回展観は明治二十六年六月四日より開催された。最終日は未確認。開館日は第一・第三日曜日、入館には切符が必要。池長孟関係資料には父・通宛の招待状(五月二十五日付)と縦覧券が伝わる(図3)。初日(六月四日)は二百四十余人、二日目(六月十八日)は四百十四、五名と多数の来館者が詰めかけた。

②⑧ 明治二十六年五月二十六日「神戸又新日報」

「川崎美術館 市内布引の同館にては第四回の列品此の程整頓した

るを以て、来る六月四日より開館し、爾後毎月第一第三の日曜日を限り切符を持参する人々の縦覧に供する筈なり。尤も、第一第三の日曜日にして雨天なれば、次の日曜日へ順延す。」

⑲ 明治二十六年六月二日「神戸又新日報」

「第四回陳列品整頓仕候に付、本月より例の通り第一第三日曜日に限り、通券御持参諸君の縦覧に供し候。但し、当日雨天なれば次の日曜日へ順延。」

六月一日

市内布引 川崎美術館

⑳ 明治二十六年六月三日「大阪朝日新聞」

「第四回陳列品整頓仕候に付、本月より例の通り第一第三日曜日に限り、通券御持参諸君の縦覧に供し候。但し、当日雨天なれば次の日曜日へ順延。」

六月一日

市内布引 川崎美術館

㉑ 明治二十六年六月三日「神戸又新日報」

「第四回陳列品整頓仕候に付、本月より例の通り第一第三日曜日に限り、通券御持参諸君の縦覧に供し候。但し、当日雨天なれば次の日曜日へ順延。」

六月一日

市内布引 川崎美術館

㉒ 明治二十六年六月三日「大阪朝日新聞」

「第四回陳列品整頓仕候に付、本月より例の通り第一第三日曜日に限り、通券御持参諸君の縦覧に供し候。但し、当日雨天なれば次の日曜日へ順延。」

六月一日

市内布引 川崎美術館

㉓ 明治二十六年六月六日「神戸又新日報」

「川崎美術館 一昨日の縦覧人は二百四十余人なりし。」

㉔ 明治二十六年六月二十日「神戸又新日報」

「川崎美術館 一昨日の来観者は四百四十五名なりしと。」

◆ 第五回展観（明治二十八年五月五日～六月九日）

第五回展観は明治二十八年五月五日から六月九日まで開催された。前年は定例開館が行われず、二年ぶりの開館となる。今回から開館日が毎週日曜日となり、開館時間も午前九時から午後四時までに変更された。最終日は雨天でも順延せず、開館を予定していた。多数の来館者を見込むなかで、美術館の運営体制が調っていったと考えられる。

㉕ 明治二十八年五月五日「神戸又新日報」

「川崎美術館 当市の川崎美術館は今五日（日曜日）を以て第五回の陳列をなし、以後毎日曜日午前九時より午後四時まで切符を持

参するものに限り、縦覧に供するよし。但し、当日雨天なれば開館せず。」

③⑥ 明治二十八年五月五日「神戸又新日報」

「本日開館。当分、毎日曜日（雨天を除く）午前九時より午後四時まで。切符御持参縦覧被成度候。

五月五日

布引 川崎美術館」

③⑦ 明治二十八年六月七日「神戸又新日報」

「川崎美術館 市内布引の川崎美術館は去月以来第五回の陳列をなし、江湖篤志家の縦覧に供し居りしが、梅雨の候に迫りしを以て、来る九日（日曜日）限り閉館する筈なるが、同日だけは縦然、雨天にても特に開館するならんといふ。」

◆名所として

明治二十年代後半から三十年にかけて、川崎美術館は名所案内に紹介されている。開館から数年を経て神戸を代表する名所のひとつとして、定着していったのだろう。開館当初は九月に展観が開かれたが、のちに五月から六月の夏場の開館が定例化したようだ。

③⑧ 明治二十八年四月十六日「神戸又新日報」

「撰播旅客案内（六） 川崎美術館

（前略）温泉場の上、川崎氏の邸内に川崎美術館あり。我国特得

の妙技と称する美術的の品々、動もすれば射利子の手に落ちて外人に販売せられ、年一年よりその数の減するを嘆き、力の及ばん限りは之れを喰ひ止め、且つ同好者を奨励して共に俱もに此の心によりて此の事を成就せんとの趣意により、川崎氏が多年蒐集せし美術品陳列のために設けしものなり。館は明治廿三年の創立に係り、毎年夏期を卜して陳列品を取り換へ取り換へて、同好者の縦覧に供ふ。本年は特に陳列品を多くし、五月第一の日曜日頃より開館すといふ。」

③⑨ 明治三十年三月発行 岡太郎吉編『神戸みやげ』神戸同盟出版社

「布引の滝 附温泉、川崎美術館

（前略）此の廓「引用者註…布引温泉」の西に当たる山腹に川崎美術館あり。当地の長者川崎正蔵氏の私立に係るものにして、同氏秘蔵の古器物古書画其他の美術品を陳列せり。春夏の候、衆庶の縦覧に供す。」

④⑩ 明治三十年四月十四日発行 鍋島直身編『神戸名勝案内記 附近

傍』日東館

「川崎美術館 同町「引用者註…加納町」の上方、川崎正蔵氏の邸内にあり。明治二十三年の建築に係り、我国の美術品を陳列する所なり。二階建にして下階を数室に区別す。每室凡そ四間四方あり。其紙門は皆応挙の筆なり。毎年夏季を以て陳列品の縦覧を許す。其内、探幽の筆寒山拾得二幅対、宋徽宗皇帝の筆花鳥図、巨

勢金岡の筆大幅仏画の如き最も名あり。其他書画、器物、仏像等世に優れたるもの頗る多し。」

④1 明治三十年十月五日発行 塚脇門蔵編『神戸名所案内』熊谷久栄堂

「川崎美術館 は川崎正蔵氏が珍藏の書画美術品を陳列す」

#### ◆第六く八回展観

第六回・第七回展観に関する記事は未確認。第八回展観は、陳列品目録が現存する(兵庫県立図書館蔵)。同目録では、美術館玄関に展示した「宝玉七宝香炉」「宝玉七宝花瓶」について「右明年、仏国巴里ニ於テ開ク所ノ万国大博覧会出品ニシテ、川崎邸内七宝製造所ノ製作ニ係ル」と記されている<sup>マ</sup>。第八回展観は、パリ万博の前年にあたる明治三十二年と推定されるが、会期は不明。同目録は冒頭に紙焼き写真三枚(長春閣及び川崎美術館の外観、「宝玉七宝香炉」「宝玉七宝花瓶」)が貼り付けられたのち、陳列品の名称が部屋ごとに記載されている。部屋と陳列件数は以下の通り。

- ① 美術館玄関 (二件)
- ② 大書院床之間 (十七件)
- ③ 上之間 (二件)
- ④ 広間 (五十四件)
- ⑤ 三之間 (二十件)
- ⑥ 東入側 (四十三件)
- ⑦ 仏間 (二十四件)
- ⑧ 西入側 (六十七件)
- ⑨ 楼上登口 (四件)
- ⑩ 楼上々段床之間 (三件)

川崎美術館研究(一) 文献資料からたどる川崎美術館と神戸川崎男爵家コレクション

- ⑪ 楼上違棚 (五件)
  - ⑫ 楼上々段之間 (三件)
  - ⑬ 楼上広間床之間 (十一件)
  - ⑭ 楼上広間 (七十九件)
  - ⑮ 煎茶席 (十二件)
  - ⑯ 茶具 (十八件)
  - ⑰ 抹茶席 (十一件)
- 合計三百七十五件

#### ◆皇太子殿下行啓

明治三十二年十一月九日の皇太子殿下神戸行啓では、湊川神社、生田神社、布引の滝ののち、川崎邸へ到着。長春閣で休憩後、美術館を鑑賞している。④③・④④では、行啓時の主な展示作品と全体で約四百点を陳列したことがわかる。

④② 明治三十二年十一月九日「大阪朝日新聞」朝刊

「東宮神戸行啓 愈今九日神戸に行啓あらせらるる旨、御治定あり。其御時刻其他の御予定は午前十一時五十四分舞子駅御発車、午後零時三十五分神戸駅御着。先づ湊川神社に御立寄りあり。夫より生田神社御参拝、玉串を捧げ玉ひりて、布引に抵らせられ瀑布御覽あらせられ、御帰途川崎正蔵氏の別荘にて御休憩の上、五時五分神戸駅御発車。同五時四十四分舞子駅御着、還啓あらせらるる御予定なりと申す。(後略)」

④③ 明治三十二年十一月十日「大阪朝日新聞」朝刊付録

「東宮神戸行啓

(中略) 川崎美術館に成らせらる。川崎正蔵父子門外にて御出迎

をなし御案内して山路の庭園を登らせられ、長春閣の御休席に入り御あり。此建物は竣工後、殿下の御立寄を仰ぎ奉りしが座敷開きなりとぞ、御休席には御用の御卓椅子予て差廻され、紅白菊花の御菓子を盛上げたり。床の間は月山の楼閣山水双幅を掲げ、置物は万曆製七宝鳳凰の香炉を安んじ、床脇には保元時代物の浦島の手箱を配しぬ。二の間は床は探幽の老松日出図を展べ、蕎麦の大花瓶を据ゑ、三の間には床に応奉の富士、支那の籠花生（秋草）を陳じたり。斯くて主人父子に謁を賜ひ、緩々御休みありて、棟つづきの洋館楼上に御登臨あり。更に庭づたひに美術館に入御あらせらる。

美術館の玄関には宝玉七宝の大花瓶一对と同大香炉とを陳じたり。是は自窯の作品にて明年の巴里大博覧会に出陳せんものとぞ。館の楼上楼下には、顔輝の寒山拾得双幅、探幽の竹に鳳凰双幅、光起の義経、陶淵明、周茂叔三幅対、周代の白花瓶、桑に葛の蒔絵十種香函、東山時代の古銅雁の香炉、玉花瓶、香炉種々、印度鍍金仏、推古帝時代地藏尊、古薩摩錦手三脚香炉、支那江西の梅花浮模様花瓶を重ねるものとし、其他四百点許りの什器を陳列し御覧に供ふ。殿下には御気色斜めならず上覧あらせあれ、楼辺の紅楓の色濃く照りそひたるを愛でさせられ、山路を切開きて蹊路をつくり植込の手を尽したるをいたく恋賞あらせ玉ひたりとぞ。林樹深き処高く空を摩せる古塔は客年、垂水の多聞寺より移築せしなりとかや。

美術館の陳列御覧終りて再び長春閣に御小休みあり。中山大夫、

高辻侍従長以下二の間に控へ、御座所には有栖川宮と御椅子を対させられ、清水谷武官して御形態の早写真器械にて御撮影を試ませられたる後、又もや庭園を御徒歩にて紅葉の錦松林の間に点綴せる辺りの茶席に入らせらる。此処には表千家大道某は待受け申し、主人正蔵翁恐る恐る御前に於て抹茶を献ぜんとせしを、殿下は『余が立てて遣はさん』と仰せあり。御手づから茶筌を取らせられ主人に賜はりつる畏さに翁は面目身に余りて洋服しつ、更に宗匠の手前にて殿下に捧げ奉り順次中山大夫、高辻侍従長、三島侍講、清水谷武官等にも進めたりとぞ。

午後三時三十分御出門（中略）是日神戸市中布引山へかけ御通路の拝観者は幾万といふ数を知らず。当地其他より神戸さして行集ひしも多かりき」

④明治三十二年十二月『京都美術協会雑誌』第九〇号

「神戸長春閣の粧飾 舞子御用邸に御静養中なる皇太子殿下には、十一月九日午前十一時四十分御出門にて、午後零時三十五分神戸へ御着となり、湊川神社、生田神社等を御参拝ありて神宝を御覧あり、布引の雄滝雌滝御覧の上、川崎正蔵氏の邸へ行啓となり、同邸新築の長春閣にご休憩あらせられ、美術館を御覧の午後三時三十分還啓と相成りたり、今長春閣の粧飾及び美術館の陳列を聞くに左の如し

上之間 床

月山筆 楼閣山水図 万曆七宝鳳凰置物

同 床脇

保元時代浦島手箱

次之間 床

探幽筆 老松旭日図 蕎麦大花瓶

三之間

応挙筆 富士図 支那駕籠草花雑挿（以上長春閣）

夏珪筆 秋景山水図（東山御藏の内） 高麗雲鶴香炉 明代達

磨置物 南蛮鉄如意 印材堤成作雄朱竹小鳥摸様硯箱 大雅堂

銀遊戯図巻物（以下数十点略之但石熊茶席）

茂古林墨跡 古銅管耳花瓶 古帖 佐筒茶碗（以下十余点略之但古抹茶席）

又美術館玄関には今回川崎邸内の七宝製作所にて製作せる宝玉七宝の大花瓶一对、同大香炉を、上之間床には探幽筆桐に竹鳳凰の双幅、上之間には光琳筆富士と松島図六枚折屏風一双、三之間には牧溪筆枯芦翡翠、敗荷鶴鴿双幅、楼上床之間には顔輝筆寒山拾得双幅（東山義政公より本願寺家へ贈りしもの）、唐太宗年製染付香炉、春日卓、違棚には桑地鳶蒔絵の十種香箱、上段之間には周代宙の花瓶、広間には光起筆中義経、左右周茂叔、陶淵明の三幅対等を始めすべて四百点内外を陳列したり」

◆パリ万博出品

明治三十三年のパリ万博には川崎正蔵も渡仏し、所蔵する美術品を出品した。なかでも、川崎が邸宅内に工房を設けて製作させた

川崎美術館研究（二） 文献資料からたどる川崎美術館と神戸川崎男爵家コレクション

「宝玉七宝花瓶」「宝玉七宝香炉」は大賞を受賞している。万博後、この作品は皇室に献上された<sup>六</sup>。

④明治三十三年四月一日「読売新聞」朝刊

「川崎正蔵氏の渡仏 神戸の川崎正蔵氏は自家所蔵の美術品を巴里博覧会に出品せしがなほ同氏は来る十八日渡仏せる由。」

⑤明治三十四年五月五日「読売新聞」朝刊

「川崎正蔵氏の献品 川崎正蔵氏は自家にて製作せる七宝焼の花瓶一对（高六尺二三寸）、香炉（高四尺回り六尺）は曩きに万国博覧会に出品せしに此度積み戻りに付、今回宮中に献納せしが右花瓶には菊香炉には龍の横刻ありて非常に立派なるものなりと云ふ。」

⑥明治三十四年五月九日「読売新聞」朝刊

「よみうり抄 七宝花瓶と香炉の献上 川崎正蔵氏が巴里大博覧会にて大褒賞を受領したる宝玉七宝大花瓶高さ五尺四寸、同大香炉高さ四尺八寸（共に蓮牡丹唐草模様）は此程宮内大臣より献納の許可を蒙りたれば、数日前搬送し来りしと。」

◆第九回展覧

第九回展覧の展観に関する記事は未見。ただし、第九回の陳列品目録は現存している（島根大学附属図書館「桑原文庫」蔵）。

◆川崎正蔵逝去(大正元年十二月二日)

④⑧大正元年十二月四日「読売新聞」朝刊

「川崎正蔵氏逝く 本邦造船界の偉勲者

神戸川崎銀行監督川崎造船所顧問なる川崎正蔵氏は予ねて胃癌を病み、須磨療院長鶴崎医学士の治療を受けつゝありしが、薬石効なく二日午前十時死去せり。享年七十六、氏は兵庫県平民川崎利右衛門の長男にて天保八年七月十日を以て生れ、維新後力を海運の發達にそゞぎ、帝国郵便汽船会社の副頭取となり、後三菱に入り東京及び神戸に造船所を設立し、尚ほ明治十九年に兵庫造船局の払下げを受けて前二ヶ所の造船所を合併し、川崎造船所と称し本邦造船界の覇者となり、廿三年貴族院議員となれり。精力旺盛にして紳士の素質に富める上に骨董の鑑識に長け、宏大なる美術館を造り、五重塔を建築せるなど人の知れる処なり。実子無く養嗣子芳太郎(四四)氏は鬼塚善兵衛氏の長男なり。養女ゆき子(二八)は林通相長男雅之助氏に、同よし子(二六)は山口男令弟次郎氏に嫁せり。尚危篤の趣、天聴に達するや特旨を以て従五位に叙せらる」

④⑨大正元年十二月九日「大阪朝日新聞」朝刊

「川崎翁の葬儀

去る三日逝去したる神戸川崎造船所顧問元貴族院議員川崎正蔵氏の葬儀は八日執行、午後一時従五位勲三等川崎正蔵の柩と記した銘旗及び目良海軍造船少監の捧持した勲三等に次いで神戸布引の本邸出棺。喪主芳太郎氏は鈍色の直垂に藁沓を穿き、

竹杖を杖き、未亡人、芳太郎氏夫人亦白無垢姿、其他二十四名の親戚男女是れに従ひ順路を春日野墓地に到り、導師京都天龍寺住職高木龍淵師を始め、相国寺、知恩院住職等二十四箇寺百五十余名の僧侶に拠つて無事終了。会葬者は藩主島津忠重公代理野本驥氏を始め、京阪神に於ける紳士縉商夥しく、大臣大将其の他朝野の名士より贈りたる弔花放鳥の類亦五百余に達した。

何処も彼所も人 川崎翁の葬儀は神戸始まつて以来の盛儀だといふ丈けあつて花環の数は三百に近く夫れに花車、檣、放鳥其の他種々の供物を合する時は実に五百以上に達するといふ始末だから、花も品切れを来し、従つて相場も暴騰し、平素十円位の花環も十五円さては二十円出しても注文に応ずる事が出来ぬとて各花屋は大に嘆して居たがウンと儲けたには違ひない。唯さへ会葬者の多い所へ見物人や山菓子貰が出たわ出たわ、布引の邸から十数町もある春日野の墓所迄殆んど人続きで殊に墓所の入口は押し合ひやし合ひ、身動きも出来ぬ程であつた」

⑤⑩大正元年十二月九日「読売新聞」朝刊

「川崎氏の葬儀(大阪)

我国造船界の覇者たる従五位勲三等川崎

正蔵氏の葬儀は今八日午後正一時自宅出棺、春日野に於て仏式を以て執行されたり。葬列の順序は各講及団体の弔旗寄贈の花車花輪等に次ぎ、高張提灯位牌銘旗に次いで目良造船少監勲章を捧持し、柩は十六人の勢子に昇かれ其の後には川崎芳太郎氏其他親戚一同之に従ひたるが、葬列は颯々として二十余町に及べり。斯くて一

時四十分春日野斎場に着し、奏樂裡に京都天龍寺住職瀧淵師、二十四ヶ寺の門末僧侶二百二十余名を従へ、着席読経の後、松方幸次郎一同を代表し弔辞を朗読し了つて焼香を為し、更に読経ありて式を終りたるゐ。此日会葬者の重なる人々は松方侯林伯各代理森市左衛門、服部兵庫県知事、鹿兒島、神戸市長、貴衆両院議員其他五千余名にて神戸市開設以来絶無の盛葬なりき。」

◆第十二回展観 追福開館（大正二年五月二日〜十一日）

前年に逝去した川崎正蔵の追福のため、第十二回展観が大正二年五月二日から十一日まで開催された。この追福展観は多数の来館者で賑わい、生前の川崎正蔵を偲んだと伝える。第十二回展観の陳列品目録（『川崎美術館第十二回陳列品目録—為徳光院殿松堂惠然大居士追福開館—』（池田文庫蔵））が現存する。

⑤大正二年五月三日「神戸新聞」

「川崎邸の美術館 山と積るゝ珍器什宝 富貴を誇る牡丹の花

九十の春光漸く尽きて春將に逝かんとする頃、布引川崎家の庭園に春の名残を飾らうとてか、名も床しい富貴草の濃き紅や、淡紅や、さては露に匂はしい白牡丹が色とりぐに咲き出でた。之等は故川崎正造翁が生前雨につけ嵐につけて丹精を凝らして愛でられたもので、今は翁の生前を偲ぶ草の一つとなった。同邸では翁の追福を祈るために、この牡丹の期を卜して同邸内の美術館を開き、是処に翁が生前収集された美術品を陳列し知名の人々を招待

して昨二日から十日間随意観覽せしめることゝなつた。昨日は多数の紳士淑女が観覽に出掛けて朝から頗る賑つたが、広やかな邸内の山を取り込んだ中腹に聳え立つた美術館の玄関から拝見して行くと、宝玉、七宝、玉堂、富貴模様の大花瓶一對を初めとして宝玉七宝の香炉、丁字風呂、杓立など、何れも翁の日本固有の七宝製造術が次第に類れ行くのを嘆いて、明治二十五年邸内に工場を造り職工を招いて自ら製造せしめられたもので、翁の美術思想の裡に国粹保存の念が深かつたことを証明すべき尊い記念品で、この中大花瓶は明治三十三年仏国巴里の万国博覽会に出品して名誉大章を受領し、我が皇室に献納して御嘉納の栄を得たこともある真に世界的美術品ともいふべく、その他能衣裳、能道具一式が美しく陳列され、大書院床の間には応挙筆旭、檜鶴、白鹿と三幅対の掛軸初めその他数品、上の間は全部応挙の画幅で満たされ、広間には去る明治三十二年十一月今上天皇陛下が未だ東宮におはしました頃、布引の滝御遊覧の際、同邸に御立寄遊ばされ、陛下御手づから御点茶の上聞し召された名譽の茶器で同家の至宝ともいふべき古瀬戸天目茶碗があり、それから三の間、東廊下、西廊下更に階上を残る方なく陳列された珍器什宝数百点は何れも支那日本の古代美術の精華で燦然として眼も綾なる心持がされる。これに依つて見るも、故米翁がこれだけ多数の珍宝を収集された努力は一方ならぬものがあつたに相違なく、更に翁が彼の造船王として盛名を馳せた一面に、如何に深奥なる美術思想と美術品に対する憧憬とを有せられたかゞ偲ばれた。邸内には諸処に椅子を配



置いて観覧者の休憩に備へ、牡丹の園の附近には抹茶席、ビヤホールールの設けなどあつて、美術品の美しさに翁の生前を偲ぶ人、後園の牡丹にその生涯を語る人等が朝の九時から閉館時間の午後四時まで三々伍伍として尽きなかつた。」

◆追福記念展観(大正七年十一月一日〜三日)と銅像製作

第十二回以降の継続的な展観が行われたかは不明である。大正七年には七回忌に際して、追福記念展観が行われた。管見のかぎり、これが川崎美術館の最後の展観である。<sup>⑦</sup>の國華の記事では各部屋の主な展示作品を記載しており、展観のさまをありありと伝える。とりわけ円山応挙の旧南禅寺帰雲院障壁画(東京国立博物館蔵)は襖三十二面、二曲屏風三隻、掛幅五幅が現存するが、「海辺老松図」十二面は美術館広間、「月夜浮舟図・江頭月夜図襖」八面は上之間、「江岸楊柳図襖」八面及び「同屏風」二曲三隻は三之間、「雪景山水図襖」四面は楼上上段之間に使用されたものである。<sup>⑧</sup>

また、七回忌に際して、川崎正蔵の銅像が製作され、布引円山に設置された。<sup>⑨</sup>に拠ると、銅像除幕式を機に川崎家では布引の敷地を一般に開放し、美術館も川崎邸内から移設する計画があつたようだ。川崎美術館をより多くの市民と共有する姿勢が伺える。

⑤大正七年十一月『國華』第三四二号

「川崎美術館陳列

神戸の富豪川崎氏では先代追福の記念として、邸内の美術館を開

き、先代の襲蔵品を陳列し、十一月一、二、三の三日間一般の縦覧を許した。我が社では嘗て川崎氏から長春閣鑑賞の開版の依頼を受けたこともあり、その襲蔵中の名画はかねがね私の胸懐を徂徠して居たものであるから、何を措いても私は西下して親しくその奇迹に接しやうとした。

出陳の点数は画幅と器物とを合せて約五百点の多数に上り、恰も一個の博物館を現出したるの観がある。然しその中何と云つても第一等の名品は顔輝と伝ふる寒山拾得の双幅である。

(中略)

旧と南禅寺帰雲院にあつた応挙の張付及襖の水墨山水は、今そっくり川崎氏の美術館に応用せられて居る。この日は画幅や陳列棚に掩はれて酷く虐待されて居たが、是れなぞも川崎氏の襲蔵中では有数のものである。かの大乗寺、金剛寺、讃岐琴平などの襖画と共に応挙を不朽にする名作で、こういふものになると応挙は流石に他の円山四条の何人よりも大きい処を持つてゐる。(後略)

⑥大正七年十一月二十九日「神戸新聞」

「米年翁銅像成る 造船界の恩人川崎正蔵氏銅像

布引山上から海を見渡した等身二倍大の見事な出来栄

来月一日翁の七周忌を卜し、除幕式並に追悼法会を営む

当地川崎造船所の創設者として本邦造船界の恩人米年翁川崎正蔵氏が長逝して以来茲に七年、来る十二月一日を以て翁の七周忌を

迎へる筈であるが、当主芳太郎氏は夙に先人の銅像を建設して永久にその風采を偲び同時にその偉業を子孫に伝へんがため、昨年六月先づ布引円山の中腹にこれが建設敷地を選定し、一方東京市外大井町千代田鑄金所彫刻場において銅像製作中の処、愈々この程竣成して同邸に到着、去る二十五日を以てその据付を終つたので来月一日の米翁七周忌日を卜してこれが除幕式を兼ね追弔法要を営むことゝなつた。当日は午後二時から天龍寺、相国寺両管長以下約二十名の僧侶に依つて仏式の追弔会を執行、法要の次第は先づ読経に始まり、次いで銅像除幕式を行ひ、天龍寺管長の偈に續いて、当主芳太郎氏から銅像建設の趣旨に就て一場の挨拶を行ひ、これに対して來賓の故人追憶、銅像竣成の祝辞などがあつて、最後に親戚その他の焼香を以て法要及び除幕式を終る、参列者には米年翁の伝記を頒る筈であるが、銅像は内匠寮御用掛で且彫塑の大家たる佐野昭氏指導の下に、新進彫塑家久野惣十郎氏及びその助手高橋祐像、伊藤作藏、小野田高節の諸氏の手で、昨年十一月塑像の製作に着手、本年四月原型成り、その後鑄造作業を急いだ結果今般竣成を見たものである。像はその大きさ等身二倍大の九尺五寸で、故人壮年時代の風貌を参酌し、翁がフロックコートを着し洋書を手にして椅子に凭れる処を現したものであるが宛として生けるが如き美事な出来栄を示している。而してその周囲を飾る台座は、当初、現今新進の聞こえある建築図案家・司法技師・工学士後藤慶二、通信技師・工学士渡邊仁、内匠寮技師吉武東里、住友家技師小川安一郎、辰野博士門下三崎弥三郎、曾根博

士門下中村順平の諸氏にこれが設計図案を依頼し、その結果渡邊工学士の考案を採用、大正七年二月工学士山田醇氏の手によって起工されたもので、台座の高さ二十九尺余、様式はルネサンスを加味し、これにオーダーを応用した頗る雄大な結構のものである。而して背面の石壁には早大講師古城貞吉氏撰、内大臣秘書官高秩父氏揮毫に係る故人の伝記を巾五尺長さ一丈の青銅に鑄造した碑文を取付け又周囲なるパラベットの石壁には『軍艦榛名進水式』『商船八阪丸試運転』『機関車竣工』など米翁遺業の実況を薄肉彫塑で現し、各青銅を以て鑄造したものが取付られてゐる外前面の左右にはモダンルネサンス高さ五尺の焰を挙げた青銅製鼎二基を据ゑ、且つ正面階段親柱の上には、同じく青銅製高さ六尺余の電灯柱二基が配され、尚ほ像の正面中央の敷石内には円形のアラビヤ模様を五色陶器製のタイルモザイクで現し、左右には円形を作つて植物が配置されてゐる。而してパラベットの両側をなせる親石には支那の慶親王邸にあつた大理石の大狗を据ゑてゐるなど、その規模の大なることは驚くべきものがある。因に布引円山の敷地は二段となつて上方は百坪、下方は五百坪を有し、像は遙か山上より川崎造船所の方を向いて建てられてゐるといふ。」

⑤大正七年十二月二日「大阪朝日新聞」朝刊

「神戸布引に遊園地を拵へる

川崎家先代の銅像除幕式を機として

海の神様・五聖堂・講堂

本邦造船界の巨人故川崎正藏翁の銅像除幕式は一日午後二時より行はれたり。建設の場所は布引円山の見晴らし絶好の地、式は祭主川崎芳太郎氏の挨拶に始まり、同氏の五男芳治氏に依りて白布の落さるるや、フロック姿にて椅子に掛かれる翁の温容現はる。それより天龍寺管長の偈、読経、清野知事以下数氏の祭文朗読及び演説あり。午後四時半、一門の人々焼香を終りたり。因に、川崎家にては故翁追善の爲め、貧民救恤金として一万円を神戸市へ寄附したるが、之れを機とし其の附近一帯の同家持山を開放して、一般人の遊園に供する外、種々の設備を施すさうで、一日の除幕式に方つて其旨を発表した。

(中略)

山上 平坦な所へは現在同家邸内にある美術館を移し、其一部を講堂として各種の講演会等に無料で使用せしめるさうである」

◆第一回売立(昭和三年十月)

昭和二年の金融恐慌の影響により、川崎造船所の経営も困難な状況となった。翌三年十月、神戸川崎男爵家では所蔵品の売立を開催、十月八日・九日に布引の川崎家本邸で下見会、十一日から十二日に大阪美術倶楽部で入札が行われた。この売立は総額二百二十三万四百四十一円に達したことが高値表から判明する。最高値は牧谿筆「達磨図」(京都・天龍寺藏)の十二万三千九百三十円。

⑤⑤ 昭和三年九月三十日「東京朝日新聞」朝刊

「川崎男家の売立 二百万円といふ大取引

神戸の川崎武之助男爵家では家財整理の故をもって、来月八日から十一日にわたりて神戸布引の本邸および大阪美術クラブに家宝書画、骨とう品の入札売立を行ふことゝなつた。川西清兵衛、武藤山治、馬越恭平、郷誠之助その他財界有力者、知名土の後援があり、景気は近来にない興奮状態を呈し、欧米から買付が来て居るともいはれ、総売上高が二百万円を突破するだらうと予想されてゐる。主なものは左の通りである。

▲東山御物牧溪筆達磨 ▲因陀羅筆寒山、玉室贊 ▲卒翁筆六祖挾担、偃溪禅師贊 ▲白良玉筆台座觀音 ▲馬麟筆柳堤牧童 ▲宝楼閣曼荼羅 ▲公忠筆文殊 ▲大日如来 ▲宗丹筆放牛山水 ▲正信筆扁鵲  
 図 ▲探幽筆養老滝三幅対 ▲応挙筆朝陽三幅対 ▲行光筆弘法大師縁起絵 ▲師宣筆四季遊楽卷 ▲長隆筆金地楼下蹴鞠屏風 ▲長生殿蒔絵手筈 ▲光琳作椿楨蒔絵硯箱」

⑤⑥ 昭和三年十月十三日「神戸又新日報」夕刊

「川崎男家の売立 二百五十万円

予想よりは少なかった 牧溪の達磨十二万三千九百円

既報の如く、大阪美術倶楽部における神戸川崎男爵家の書画骨董類三百六十二点の大売立の開札は、十一日午後十一時から夜を徹して今朝六時に及んだが、総計二百五十万円の売上に達したが、開札前の呼び声三百万円に比べると大分少かったのは、財界の不

況が如何にこの方面にまで深く込み込んで来たかを立証するといはれてゐる。因に、主な売上品及び金額は左の通りである。

牧溪の達磨十二万三千九百三十円、因陀羅の寒山五万三千九百三十円、九十翁六祖挾担四万一千九百三十円、宝楼閣曼荼羅五万四千三百円、李白觀瀑・桃源山水二幅対三万五千九百円、宗丹放牧山水四万三千九百三十円、鳥窠禪師・黄龍禪師二幅対三万三千九百円、長隆金治楼下蹴鞠屏風八万三千九百九十円、応挙の中朝陽三幅対十一万一千九百円、磁青磁浮牡丹瓢花生五万一千九百九十円、七宝鳳凰香炉四万八千九百六十円、水銀銅龍首三万九千三百円、乾山色絵秋草鉢三万三千六百九十円」

⑤昭和三年十月十三日「大阪朝日新聞」夕刊

「売上の総額二百六万円に上る

最高値は牧溪の「達磨」 記録破りの川崎家売立

大阪美術倶楽部における川崎男爵家の大売立は十一日午後十時二十分開札をはじめ、翌十二日未明に掛けて徹宵開札をつづけたが、夜の更くるにしたがつて一万円以上の大ものが続々現はれて会場の雰囲気は次第に高調を帯び、応挙の三幅対が十一万九千九百円で、春海が落札したときや、当日の筆がしらとして各方面の注視を浴びてゐた牧溪の「達磨」が午前四時ごろ十二万三千九百円の最高価格で山中の手に落ちた時は、さすがに各部屋にワツとぎはめきの声が湧き起つた。この日京都、大阪の両山中がしきりに買ひに出で、牧溪をはじめ卒翁の「六祖挾担」「宝楼閣曼荼羅」「推

古金銅仏」などの大ものを射とめたが、これらの紹介者を通じて東京の大倉男その他名士の手が動いてゐることも見のがせない。やすいところでは応挙の菜花蝶楓小鳥屏風の二百円、時代黒無地桐鳳凰彫中央卓の百円、古瀬戸茶人の同百円、呂宋真壺（銘こぶ）の百円などが数点あつた。かくて、翌午前四時半にいたり、漸く開札を終つたが、売上総額二百五万八千四百三十円、不景気の祟りが下見予想の三百万円には達しなかつたが、それでも近年斯界のレコードを破つた。主なる落札左の通りである（以下、落札作品、落札額、落札者を列挙）」

#### ◆第二回売立（昭和十一年二月～三月カ）

神戸川崎男爵家では昭和十一年に二回目の売立を企図した。『長春閣蔵品展覧図録』（同年二月八日発行）によると、二月二十六日に東京美術倶楽部で特別内見、同月二十七日・二十八日に前下見、三月八日から十日に神戸市布引の川崎家本邸で展覧、同月十二日に大阪美術倶楽部で入札という日程で、札元には大阪・京都・東京の名だたる古美術商が集う大がかりな売立であつた。売立目録も豪華なつくりで、この売立の特殊性を伺わせる。売立に上げられた作品は、伝顔輝筆「寒山拾得図」（重要文化財・東京国立博物館蔵）や伝銭舜举筆「宮女図」（国宝・個人蔵）、伝夏珪筆「風雨山水図」（重要文化財・根津美術館蔵）、伝牧谿筆「蓮に鶴鴿・葦に翡翠図」（MOA美術館蔵）、「千手觀音像」（国宝・東京国立博物館蔵）、雪村筆「楊柳水閣図」、狩野探幽筆「桐鳳凰図屏風」（サントリー美術館蔵）、円山

応挙筆「海辺老松図襖」(東京国立博物館蔵)、勝川春章筆「雪月花図」(摘水軒記念文化振興財団蔵)、「浦島蒔絵手箱」(シアトル美術館蔵)など、神戸川崎男爵家が誇るコレクションの数々であった。生誕一〇〇年の節目に、川崎正蔵とコレクションを顕彰する意味合いもあつたのだろう。

しかしながら、特別内見の二月二十六日に二・二六事件が発生。入札展観は無期延期となった<sup>九</sup>。ただ、特別内見の早朝に東京美術倶楽部を訪れた松下隆章氏によれば、作品展観の準備は万端で、目錄の名品がずらりと並んでいたという。福井利吉郎氏などの美術史研究者や古美術商が川崎家のコレクションを目にしたながら、事件の情報に一喜一憂していたと伝える<sup>一〇</sup>。特別内見は午前十時過ぎには終了となったようである<sup>一一</sup>。

その後、不思議なことに前下見・入札の情報を除いた『長春閣蔵品展観図録』が昭和十三年に再刊されている。売立の仕切り直しを企図したのか、それとも神戸川崎男爵家コレクションの名品図録として再刊されたのだろうか。谷信一氏は、第二回売立を再度行う噂をしばしば耳にしたが、同十九年段階でも延期されたままでであると伝える<sup>一二</sup>。第二回売立は幻の売立となったようである。

⑧昭和十一年二月二十六日「東京朝日新聞」朝刊

「神戸川崎男爵家蔵品入札東京特別展観

期日二月二十七日(木曜)二十八日(金曜)二日間下見

場所芝区新橋七丁目 株式会社東京美術倶楽部

札元 東京 川部商会・本山豊實・中村好古堂・山澄商店・伊藤

平山堂・石井三柳堂

大阪 山中吉郎兵衛・山中商会・児島嘉助・池戸宗三郎・

戸田弥七・春海商店・坂田作治郎・水原金兵衛

京都 林新助・林新兵衛・土橋永晶堂・服部来々堂・山中

合名会社」

⑨昭和十一年二月二十七日「東京朝日新聞」朝刊

「至急謹告

今回男爵川崎家入札展観ノ儀、都合ニ依リ一時延期仕候間、御了承給ハリ度、何レ期日決定ノ上改メテ謹告可仕候

昭和十一年二月二十六日 神戸市川崎男爵家札元一同」

◆昭和十三年阪神大水害を経て

昭和十三年七月三日から五日に発生した阪神大水害では、神戸市を中心に甚大な被害が発生した。布引の川崎邸も大きな被害を受けたよう<sup>一三</sup>で、同十四年に神戸市が川崎邸の敷地や美術館を川崎家から継承し、布引公園として再生する計画が伝えられている。川崎美術館も神戸市が引き継ぎ、修理の上で活用する予定だったようである。戦時中は市長の公邸として使用していたが、同二十年六月五日の神戸大空襲で茶室不動閣を残して焼失してしまったという<sup>一四</sup>。

⑥昭和十五年一月八日「大阪朝日新聞（神戸版）」

### 「待望の『布引公園』二ヶ年後に川崎邸更生」

すぐる大水害に一瞬にして消え去った神戸布引川崎邸はその名も懐しい『布引公園』として二ヶ年後には明朗、健康の地帯に更生する鉄入れの日も近い―これぞという公園に恵まれなかった港都神戸にとって『布引公園』の出現こそはまさに渴望を満たすものといつてよい、いまその全貌をのぞいて見ると―公園敷地は旧川崎邸三万九千二百十三坪三合二勺のほかこれに接続する民有地二千四百坪九合三勺道路数九百八十三坪合計四万二千五百九十四坪二合五勺という広大なもので、このうち平地は一万坪以上、山地が三万一千坪旧川崎邸の後に迫っていた翠巒布引山はいわゆる山地部となる、平坦地も上下二段からなり下段が六千余坪、上段は五千坪内外としてすべてに地形の変化を取入れた明粧が施される、まず下段の平坦地は一律に緑の芝生を布きつめたカーペットとなり点々と配植される数百種の花木はモザイクとなり縦横に走る曲線の逍遙路は大柄の縞模様となる、大芝生西南の一角約三百坪の箇所はこどもたちのため児童遊園として開放される、美術館、茶室も公開されるのでその道の人達によって趣味の催や集いに間断なく利用されることだろう」

### おわりに

近代の神戸で川崎正蔵が熱意を持って収集したコレクションと国民の益となることを企図した川崎美術館。神戸を代表する名所、文

川崎美術館研究（二） 文献資料からたどる川崎美術館と神戸川崎男爵家コレクション

化施設として神戸市民をはじめ多くの人々に親しまれ、作品の数々は日本・東洋美術史の研究に大きく貢献してきた。金融恐慌、二・二六事件、阪神大水害、太平洋戦争とさまざまな歴史の波を受けたことで、コレクションは散逸し、美術館は姿を消してしまった。しかしながら、日本初の私立美術館として、神戸市の博物館の系譜のみならず、日本の博物館史上できわめて意義ある美術館であることを改めて見つけ直す必要があるだろう。そして、川崎正蔵や神戸川崎男爵家の収集品は売立によって惜しまれながら散逸することとなったが、昭和初期の実業家のコレクション形成と私立美術館建設へと繋がっていく。神戸川崎男爵家の優れたコレクションは『長春閣鑑賞』と二度の売立目録を手がかりに、今も国内外で多くの作品が同家旧蔵として守り伝えられている。川崎正蔵が築いたコレクションと美術館の意義はきわめて大きい。

現存する旧蔵品の調査研究や川崎美術館の展観の詳細については、引き続き調査、考察を進め、紹介することとしたい。

一 川崎芳太郎編『長春閣鑑賞』（國華社、一九一四）は国会図書館デジタルコレクションで公開。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2610836>

なお、『長春閣鑑賞』と二度の売立目録では、掲載作品の一部に重複がある。

二 大倉集古館の前身「大倉美術館」は明治三十四年に完成したこと

がわかる。

SK生「大倉美術館を観る」(『読売新聞』一九〇一年十二月六日)  
また、大倉集古館を遡る私立美術館としては、大正二年十月十五日に広島市に開館した浅野家の「観古館」がある。

『観古館』(榎田直太郎、一九一六)

村上勇「わが国初の私立美術館―浅野家・観古館について」『広島県立美術館研究紀要』第九号(二〇〇六)

三 川崎美術館に関する先行研究は次の通り。

山本実彦『川崎正蔵』(吉松定志、一九一八)

三島康雄『造船王川崎正蔵の生涯』(同文館出版、一九九三)

中野明「第3章 造船王 川崎正蔵と神戸布引「川崎美術館」

『幻の五大美術館と明治の実業家たち』(祥伝社、二〇一五)

辻智美「松方幸次郎の周辺―川崎正蔵と川崎美術館」『松方コレクション展―松方幸次郎 夢の軌跡―』展図録(神戸市立博物館・神戸新聞社、二〇一六)

四 壽々木雪山「近世名匠伝(二三) 日本建築家 柏木貨一郎」『建築工芸叢誌』第二期第一五冊(一九一六)

なお、柏木は明治初期の博物館行政に携わり、正倉院などの古社寺調査に参加した、また、数寄者とも交友を深めたが、特に益田孝(鈍翁)とは親しく交わり、明治十三年に鈍翁が建てた禅居庵も柏木の設計である。柏木自身も「源氏物語絵巻」「地獄草紙」などを所蔵する収集家であった。川崎のコレクション形成と美術館建設について、柏木との交友もきつかけとなった可能性がある。

山口昌男「日本近代における経営者と美術コレクションの成立―益田孝と柏木貨一郎」『比較文化論叢』第二号(二〇一一)

五 岡本隆志「中国式七宝の再現に捧げられた情熱―川崎正蔵・梶佐太郎の「宝玉七宝」について」『七宝工芸の近代』展図録(宮内庁三の丸尚蔵館、二〇〇四)

六 『明治期万国博覧会美術品出品目録』(中央公論美術出版、一九九七)

山本実彦『川崎正蔵』によると、宝玉七宝は好評を博し、ベルギー皇帝から幾度も譲ってほしいと打診を受けた。しかし、川崎は初めての製作品の上、世界的成功を得た作品なので皇室に献上したいと伝え、打診を断っている。

なお、パリ万博で開催された「日本古美術展覧会」ののち、明治三十四年に帰国した作品は、東京帝室博物館にて二回に分けて展示された。第一回特別展覧会(四月十五日〜五月五日)では、川崎正蔵の所蔵品二十六点が展示されたことが『第一回特別展覧会目録、第二回特別展覧会目録(合本)』(東京文化財研究所蔵)から判明する。硯箱、印籠、香炉など工芸品を主としたほか、伝明兆筆「観世音菩薩像」、伝宅磨勝賀筆「文殊菩薩像」、狩野探幽筆「雲中地藏像」が出品された。

七 なお、同時期(十月三十一日・十一月一日・十一月三日)には神戸市会下山で池長孟の「池長植物研究所」開所式も行われている。

「池永植物研究所開所式」(『大阪朝日新聞』一九一八年十一月四日 日朝刊)

八 『川崎美術館第八回陳列品目録』(一八九九、兵庫県立図書館蔵)『長春閣鑑賞』第三集(國華社、一九一四)第四図〜第十五図

『龜山法王700年御忌記念 南禅寺』展図録(東京国立博物館・京都国立博物館、二〇〇四)

九 田澤田軒「昭和十一年上半期古美術の動き報告」『中央美術』第三六号(中央美術会、一九三六)

一〇 松下隆章「博物館の新収品 顔輝の寒山拾得図」『MUSEUM』第三号(一九五一)

一一 谷信一「川崎・津軽両家の寒拾図」『美術』第九号(日本美術出版、一九四四)

一二 註一一 谷論文

一三 『神戸市史 第三集 社会文化編』(神戸市、一九六五)





図1 川崎美術館



図2 長春閣



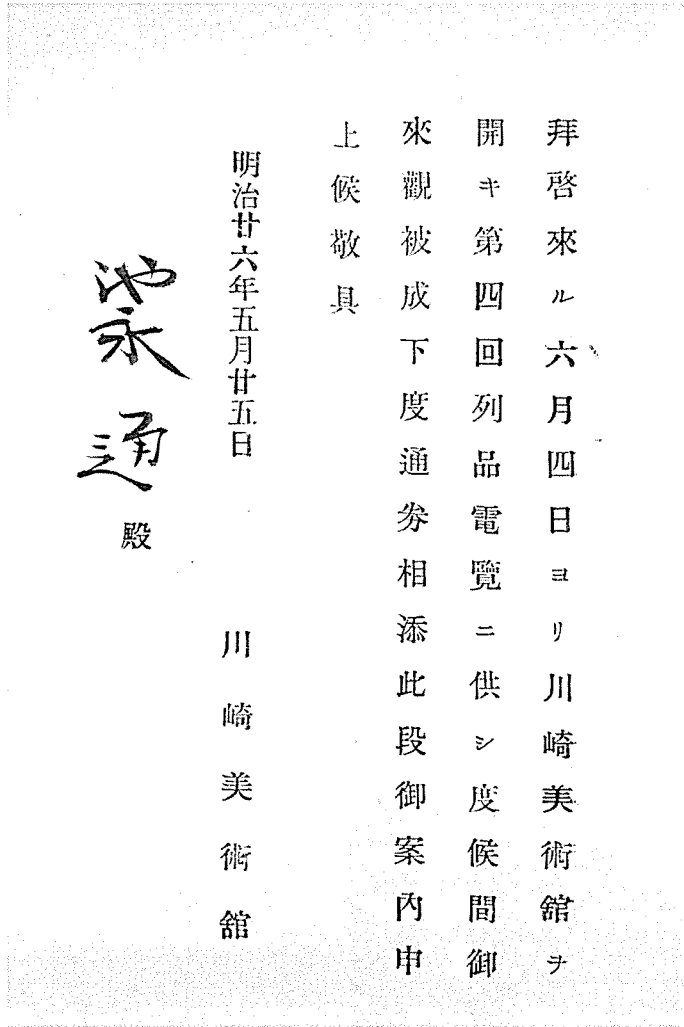
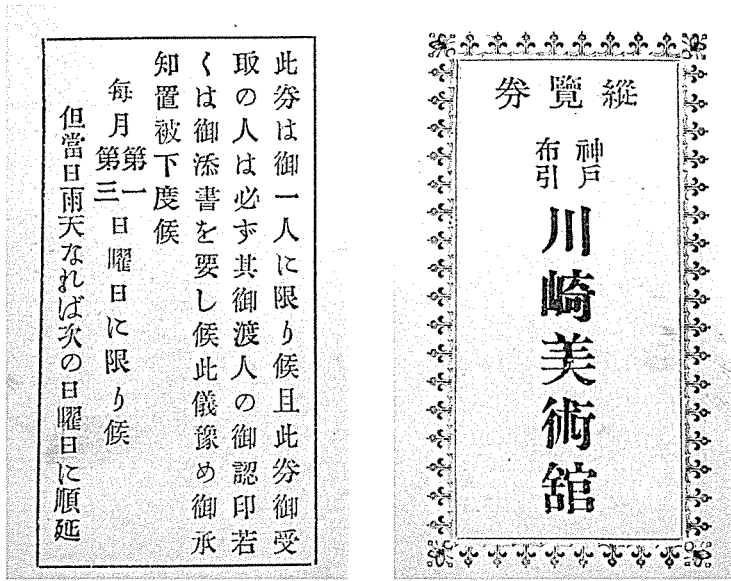


図3 第4回展観 招待状・縦覧券

[図1・2は『長春閣鑑賞』より転載]

元号	西暦	川崎正蔵及び神戸川崎男爵家コレクション	出典	日本の博物館史
天保7年	1836	7月10日 薩摩の呉服商人の子として誕生		
嘉永6年	1853	長崎へ出て、貿易商の修行を積む		
文久3年	1863	大阪へ移り、海運業を開始		
明治2年	1869	薩摩藩士が設立した琉球糖を扱う会社に就職		
明治5年	1872			3月10日 文部省博物館、湯島聖堂大成殿での博覧会にて博物館を設置(東京国立博物館の創立・開館) 5月-10月 壬申検査
明治6年	1873			5月1日-11月2日 ウィーン万博の日本列品場で工芸品等を展示
明治8-9年頃	1875-76頃	美術品の収集を開始カ	高橋義雄『近世道具移動史』	
明治9年	1876			博物館初代館長に町田久成就任
明治10年	1877			第1回内閣勲業博覧会が上野・寛永寺本坊跡地で開催。「美術館」設置
明治11年	1878	川崎築地造船所(東京)を開設(創業)		
明治14年	1881	3月 兵庫川崎造船所開設 10月10日 全進丸を抵当に大蔵省国幣局より5万円を借用。神戸布引山の山林、山本通と布引遊園地の宅地を浜崎家から買入	『造船王 川崎正蔵の生涯』	第2回内閣勲業博覧会が上野公園で開催。ジョサイア・コンドル設計の博物館本館が完成。1階を美術館として使用 4月 博物館、農商務省へ移管
明治15年	1882			3月20日 明治天皇、博物館に行幸。開会式が執り行われる。式後、一般公開
明治17年	1884	11月1日 松方正義、川崎正蔵へ書簡。今夏より幸次郎がラトガーズ大学へ入学。留学費用を支援。川崎所蔵の長沢芦雪筆「鳳凰図」を、伊蔵氏掃京の節に拝見を申出	松方正義「書簡(川崎正蔵宛・11月1日)」	
明治18年頃	1885	布引に邸宅建設開始		
明治18年頃	1885	山中蘆簪堂より、伝顔輝「寒山拾得図」を購入		
明治19年	1886			博物館、宮内省へ移管
明治21年	1888	10月以降 宮内省・九鬼隆一による美術品調査カ		宮内省、臨時全国宝物取調局を設けて、全国の文化財調査を実施
明治22年	1889	川崎美術館、建設開始 12月 臨時全国宝物取調委員による『美術録写真』(宮内庁書陵部図書寮文庫)完成 第5帙「山水ノ図」(雪村筆)、「山水ノ図」(正信筆) 第6帙「鴨ノ図幅」(円山応挙筆) 第7帙「雨中山水ノ図」(夏圭筆)「寒山ノ像」「拾得ノ像」(伝日顔輝筆)	③・⑧ 宮内庁書陵部所蔵資料目録・画像公開システム <a href="https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Detail/1000517770000">https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Detail/1000517770000</a>	博物館、帝国博物館となる。帝国奈良博物館、帝国京都博物館を同時に設置
明治23年	1890	川崎邸本館、川崎美術館、長春閣完成 9月1日 九鬼隆一、川崎美術館開館式に際して祝辞を贈る 9月4日夜 伊藤博文、宇治川常盤楼で「川崎美術館」の扁額を揮毫 9月6日14時- 川崎美術館開館式 9月7日-8日 第1回展覧 9月7日夜 川崎邸で伊藤博文、高島新之助、中井弘、藤田傳三郎を饗応 9月15日 松方正義、川崎正蔵へ書簡。開館式盛況の拝察と、九鬼・佐野の欠席を遺憾に思う旨 9月18日 海外留学中の松方幸次郎、掃国の折、川崎邸を訪問 10月28日16時-21時 川崎正蔵、懇意の人々を川崎邸での宴会に招待。美術館特別開館 第2回展覧カ	⑥・⑬ ⑤・⑧ ②・⑤・⑧・⑨ ①・⑪ ⑦ ⑫ ⑭	
明治24年	1893	4月17日午後 伊藤博文、布引川崎邸を訪問し、美術品を鑑賞 8月13日 中井弘、川崎正蔵へ書簡。9月1日に千田貞暁・京都府知事が川崎美術館訪問する旨	⑮ 『造船王 川崎正蔵の生涯』	
明治25年	1892	8月 川崎正蔵、松方正義へ書簡。9月の美術館陳列へ来館を促す 9月1日 松方正義、川崎正蔵へ書簡。今月の定例開館は折を見て拝見する旨 9月8日 第3回開館に向けて展示作業開始 9月18日-11月6日 第3回展覧 邸内に七宝焼工場をつくる(明治28年・同30年とする説もあり)	『松方正義関係文書』第7巻 松方正義「書簡(川崎正蔵宛・9月1日)」 ⑯ ⑰-⑳	
明治26年	1893	5月28日 第4回展覧に向けて、展示品の準備開始 6月4日- 第4回展覧 6月4日 入館者240余人 6月18日 入館者414-5人	⑳ ㉑ ㉒ ㉓	
明治28年	1895	「撰播旅客案内」に掲載 5月5日-6月9日 第5回展覧 12月6日 松方正義、川崎正蔵へ書簡。川崎秘蔵の掛軸拝見を切望	㉔ ㉕-㉖ 松方正義「書簡(川崎正蔵宛・12月6日)」	
明治29年	1896	10月10日 フェノロサ、九鬼隆一の紹介で川崎邸を訪問 10月12日 フェノロサと妻メアリー、川崎邸を訪問。伝顔輝「寒山拾得図」、月山「樓閣山水図」、趙大年、西金居士、応挙「雪景山水図」、信実「聖徳太子像」等を鑑賞 10月15日 株式会社川崎造船所(神戸)創立。松方幸次郎、初代社長に就任	『フェノロサ氏山本実彦「川崎正蔵」吉松定志、大正7年』 「メアリー・フェノロサ日本日記」 「メアリー・フェノロサ日本日記」	
明治30年	1897	『神戸みやげ』に掲載 『神戸名勝案内記 附近傍』に掲載	㉗ ㉘	帝国京都博物館・帝国奈良博物館開館
明治32年	1899	第8回開館 11月9日 皇太子殿下、神戸行啓。布引瀧御覧後、川崎家別荘(布引川崎邸)にて御休憩。川崎美術館を鑑賞	『川崎美術館第8回陳列品目録』(兵庫県立図書館)	大倉美術館開館カ
明治33年	1900	4月18日 万博に所蔵品を出品するため、渡仏。洋行中は、狩野常信「雲白鷺図」と梅干し、日本茶を常に敬愛 5月上旬 万博で大賞を受賞した「宝玉七宝花瓶一対」及び「同香炉」を皇室へ献納	⑳ ㉙-㉚ ㉛-㉜	帝国博物館・帝国京都博物館・帝国奈良博物館が、東京帝室博物館・京都帝室博物館・奈良帝室博物館と改称
明治35年	1902	乾ドック(神戸工場 第1ドック)完成		

元号	西暦	川崎正蔵及び神戸川崎男爵家コレクション	出典	日本の博物館史
明治35年以降?	1902-	3月9日 松方正義、川崎正蔵へ書簡。松方が所蔵する岩佐又兵衛の絵巻を800円で購入するよう、川崎へ依頼	松方正義「書簡(川崎正蔵宛・3月9日)」	
明治38年	1905	10月28日 (資)神戸川崎銀行設立(-大正6年)		
大正元年	1912	12月2日 川崎正蔵逝去 12月8日 川崎正蔵葬儀	㉔ ㉕-㉖	
大正2年	1913	5月2日-11日 第12回開館 一周忌追福開館	㉗ 『川崎美術館第12回陳列品目録-為徳光院殿浴室惠然大居士追福開館一』(池田文庫蔵)	10月15日 広島市の縮景園内に観古館開館
大正3年	1914	12月1日 川崎正蔵三回忌に際して、『長春閣鑑賞』全六冊、國華社より刊行。川崎芳太郎、正蔵の異友であった朝日新聞社長長村山龍平・上野理一・山中吉郎兵衛に相談し、優品388点を選出 12月2日 三回忌。正蔵の友人や有名図書館に『長春閣鑑賞』を寄贈		12月 九鬼隆一、三田博物館開館
大正4年	1915	3月21日 川崎正蔵追福大法要が徳光院で執り行われる。		
大正6年	1917	ジョサイア・コンドル、「川崎邸設計図」(京都大学所蔵)作成(のち、コンドルが亡くなったため、建設は中止)	河東義之「コンドルと邸宅建築-生活文化史を視野に入れて-」 『学苑・近代文化研究紀要』第827号	8月 財団法人大倉集古館開館
大正5年	1916	10月11日 (株)神戸川崎銀行設立		松方幸次郎、絵画収集を開始
大正7年	1918	11月1日-3日 川崎正蔵追福記念展覧 12月1日 川崎正蔵七回忌。銅像の除幕式行われる。来賓に伝記『川崎正蔵』が贈られる 川崎家、長春閣・不老庵・美術館の処分について計画中	㉘ ㉙・㉚ 『今上天皇行啓』(山本実彦『川崎正蔵』吉松定志、大正7年)	5月 大倉集古館、一般公開開始 10月31日・11月1日・11月3日 会下山の池長植物研究所開所式
大正9年	1920	7月13日 川崎芳太郎逝去 8月 (株)神戸川崎銀行、十五銀行に合併		
大正12年	1923			9月1日 関東大震災。帝室博物館は表慶館以外で大被害
大正13年	1924			2月 皇太子殿下御成婚を記念して、京都帝室博物館は京都市へ下賜され、恩賜京都博物館となる。東京帝室博物館の管轄は東京・奈良の2館と正倉院のみとなる。
大正15年	1926			5月1日 東京府美術館(現在の東京都美術館)開館
昭和2年	1927	金融恐慌	㉛	
昭和3年	1928	10月8日-9日 第1回神戸川崎男爵家売立 下見(於 神戸市布引 川崎家本邸) 10月11日-12日 第1回神戸川崎男爵家売立 入札(於 大阪美術倶楽部)	㉜・㉝	
昭和5年	1930			11月5日 大原美術館開館
昭和6年	1931			4月7日-9日 池長孟、神戸丸で「長崎絵展覧会」開催
昭和8年	1933			11月 大札記念京都美術館(現在の京都市美術館)開館
昭和9年	1934			5月 白鶴美術館開館
昭和11年	1936	2月26日 第2回神戸川崎男爵家売立 入札展覧、二・二六事件で一時延期 2月27日-28日(予定) 第2回神戸川崎男爵家売立 前下見(於 東京美術倶楽部) 3月8日-10日 午前9時-午後5時(予定) 第2回川崎家売立 入札展覧(於 神戸市布引 川崎家本邸) 3月12日(予定) 第2回川崎家売立 入札(於 大阪美術倶楽部)	㉞ ㉟	5月1日 大阪市立美術館開館 6月 熊内町一丁目に池長美術館起工
昭和12年	1937			11月 東京帝室博物館復興本館(現在の本館)竣工
昭和13年	1938	3月1日 『長春閣蔵品展覧図録』再刊 7月5日 阪神大水害。川崎邸内は甚大な被害を受ける	㊱	5月25日 池長美術館竣工式 7月5日 阪神大水害。池長美術館は被害を免れる
昭和14年	1939	川崎重工業株式会社として社名変更 神戸市が布引公園の開設、美術館(長春閣)を川崎家から買収し、美術館の修理を行う。戦時中は市長公邸として使用		ロンドン保管の松方コレクション、倉庫火災で焼失
昭和15年	1940	神戸市、川崎邸跡を布引公園として2年後に再生すると発表	㊲	4月1日 池長美術館、一般公開
昭和20年	1945	6月5日 神戸大空襲。旧川崎邸は10棟のうち、茶室不動閣を残して焼失		
昭和22年	1947			東京帝室博物館・奈良帝室博物館、宮内省から文部省へ移管。文化財保護委員会の附属機関となり、東京国立博物館・国立博物館奈良分館と称する
昭和26年	1951			4月 恩賜京都博物館、国に移管。京都国立博物館となる 4月1日 池長孟、池長美術館とコレクションを神戸市に委譲 7月1日 市立神戸美術館開館。池長孟が同館顧問となる
昭和27年	1952			7月 国立博物館奈良分館、独立して奈良国立博物館となる
昭和34年	1959			6月 国立西洋美術館開館
昭和40年	1965			市立神戸美術館、神戸市立南蛮美術館に改称
昭和44年	1969			5月1日 神戸市立考古館開館
昭和48年	1973			11月 香雪美術館開館
昭和57年	1982			11月3日 神戸市立博物館開館

※日本の博物館史は戦前に設立された主な博物館と神戸市内の主な博物館を対象とした。

## **Study of the Kawasaki Art Museum (1): Consideration of the text of the Kawasaki Art Museum and the Baron Kawasaki Collection**

**Shun ISHIZAWA**

Baron Kawasaki Shozo was an important businessman in Kobe and Japan from the Meiji to the Taisho era. He collected a lot of Japanese and East Asian Arts not for himself but for Japanese people and history. In 1890, he established a private museum "The Kawasaki Art Museum" in his house in Kobe city. Although this museum is the first private museum in Japan, the Kawasaki Art Museum have been forgotten in the history of Kobe, Japanese art and museum. This report is a start of study about the Kawasaki Art Museum. In this report, the articles or texts about the Kawasaki Art Museum and the Baron Kawasaki Collection are presented from the contemporary newspapers or magazines. These articles and texts make clear the importance of Kawasaki's Museum and Collection in the history.

## **Study of record of a drinking bout with the glass sake cup "Kushitama-hai"**

**Sota NAKAYAMA**

Glass sake cup "Kushitama-hai" contained in the Biidoro Shiriyoko Collection has been transmitted along with the four records which is described drinking bout. The drinking bout records are composed of 甲 (1804 to 1870), 乙 (1857 to 1864), 丙 (1881 to 1990), 丁 (1905 to 1906).

This article will confirm the main participants of drinking bout records 甲, 丙, 丁 except 乙 which was introduced in the previous journal No.33, and will show that the glass sake cup "Kushitama-hai" was in the old Takagi Tozan collection. In addition, this article also mention the possibility that the glass sake cup "Kushitama-hai" was transferred to Fukui village in Osaka.